

「木育」を検討するにあたっての方向性について

1 木育がなぜ今必要なのか

生活の洋式化や代替品の進出に伴い、身近な生活用品から木材、とりわけ国産材の利用が減少している状況にある。また、住環境の変化や、プラスチック製品の普及などにより、木製品が生活の中から著しく減少している。さらに、それと連動するように、趣味の多様化、インターネットや家庭用ゲーム機の普及などにより、余暇活動から日曜大工や趣味の木工芸などを行う者が減少・高齢化してきている。結果、それらの材料である木材からも疎遠になる傾向がある。

適切に管理された森林から伐採された木材を使うことは、森林の整備に貢献するだけでなく、地球温暖化の防止や大気・水・土壌などの環境の維持に貢献するという意義がある。

しかし、近年は、環境や健康に関心があっても、木材に触れる機会が減少していることから、木材を使う意義についての認識が低い傾向にある（特に、平成15年森林と生活に関する世論調査結果に代表されるように若い世代において、間伐材等の木材利用と森林の整備の関わりが希薄化している）。

このような観点から、平成18年9月に閣議決定された「森林・林業基本計画」において、市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ教育活動を「木育」と呼称・推進することが明記された。

【森林・林業基本計画（抜粋）】

市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、「木育」ともいべき木材利用に関する教育活動を推進する。

2 木育で何を指すのか

「木育」は、木材を利用してゆくための単なる普及活動に留まるものではなく、木材を利用することを通じて、「産まれた時から老齢に至るまで木材に対する親しみをもつこと」、「木材の良さや特徴を学び、その良さを活かした創造活動を行うこと」、「木材の環境特性を理解し、木材を日常生活に取り入れること」と位置付けられる。

また、これらを通じて、様々な素質を持った人間（例えば、森林育成活動へ参画する人間や自然環境及び生活環境について自ら考え行動できる人間など）を「育む」きっかけとなる活動であると位置づけられる。

3 「木育」はどのように進められるか

「木育」は、様々な世代を対象とする活動であり、対象者によって、その内容が異なることから、段階的な取組（ステップ・バイ・ステップの取組）を行うことが大切である。

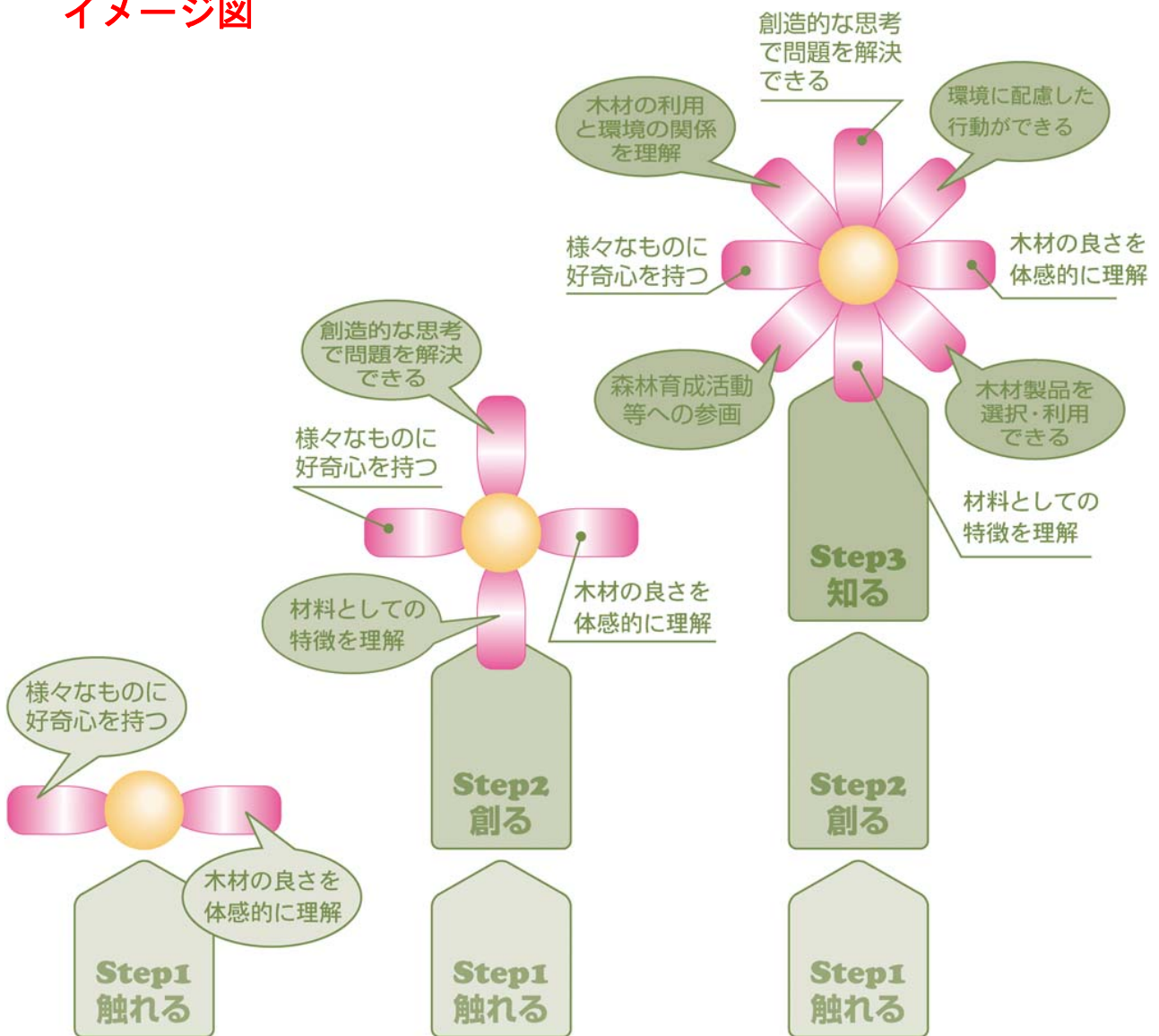
- 具体的には、**ステップ1 触れる活動「触れ、感じる」**
- ステップ2 創る活動「創り、楽しみ、学ぶ」**
- ステップ3 知る活動「知り、理解し、行動する」**

の3段階の活動を段階的に進めることで、様々な素質を持った人間を、あたたかも花が開くように育むことができる（下図参照）。

なお、「木育」を進めるにあたっては、対象者の年齢や知識にあわせて、ステップ1、ステップ2、ステップ3で活動内容が異なるため、対象者に応じたパターン分け（例えば、幼児用、児童用、社会人用等）をすることが必要である。

また、今回提示する各ステップは、基本的な流れを示すものであり、対象者の木材に対する認識や理解度に応じて、初期段階のステップを省略したり、ステップの順序を組み替えることも想定される。

イメージ図



4 各段階での活動とそれにより育まれる人間

ステップ 1 触れる活動「触れ、感じる」

(1) 活動の概要

現在、身近な生活用品から木材、とりわけ国産材の利用が減少している状況にあることから、木材に触れ・感じる機会についても少なくなっている。

このため、まずは自然素材としての木材の有する「暖かさ」「やさしさ」に代表されるような感覚的な木材の良さについての認識を、大人の押し付けでなく、五感を通じた楽しい活動を通じて持つことが重要である。これにより、体験者、特に子供たちには「木材が好き」「木材と仲良くしたい」といった気持ちが醸成され、木材の良さを体感的に理解した人間が育まれる。このことは、一緒に体験する友人や親、場合によってはその場で初めて出合った人とその気持ちを共感することによって、より深まっていく。

また、活動を通じて、「木ってなに?」「どうしてこんな匂いがするの?」といった、様々なものに好奇心を持つ人間が育まれる。

このような子供たちが楽しい時間を誰かと共感した体験は、将来、地域の森林や木材について気づききっかけが得られる。

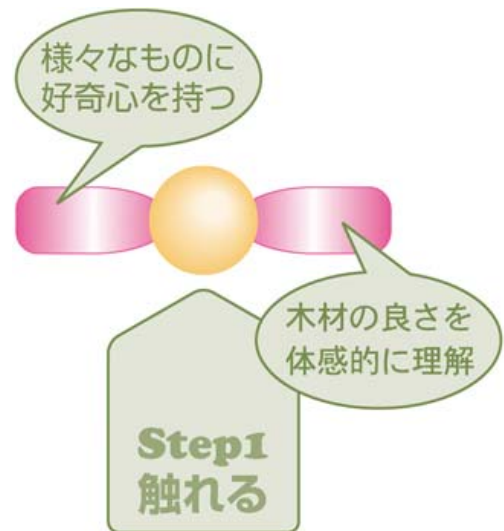
(2) この活動によって目指すもの（育まれるもの）

- ・ 木材の良さを体感的に理解する人間
- ・ 様々なものに好奇心を持つ人間

(3) 活動のキーワード

- ・ 木製遊具・おもちゃ
- ・ 木で囲まれた環境（住環境）
- ・ 生活用品での木製品
- ・ 古い建築物 等

※これらの活動は、年齢層ごとに考える必要がある。



(4) 活動を行うに当たっての留意点

本活動を進めるに当たっては、五感の中でも、普段、あまり意識されることのない、触角や嗅覚を働かせることで、意識に残る活動となるように工夫することや、対象範囲を母親が木製品を使うことによる胎教までをその対象とすることも大切である。

また、対象者は幼児等の若年齢層を中心とした木材に特段の関心の無い人となることが想定されるため、解説的な活動の導入は困難であると思われる。各年齢層に応じた活動内容とし、体験者に良い印象を与える、楽しい活動となるような工夫が必要とされる。

ステップ 2 創る活動「創り、楽しみ、学ぶ」

(1) 活動の概要

我が国では木材を用いた「ものづくり」が盛んに行われてきたが、現在では、社会環境の変化から、「ものづくり」の機会は減少してきている。

しかし、木工や工芸を通じた「ものづくり」は、我が国の技術や文化の基礎になっているだけでなく、「ものづくり」を行う過程において、自ら考えつつ様々な障害を解決することから、創造的な思考で問題を解決できる人間を育てることとなる。

また、このような「ものづくり」活動を行うにあたっては、木材のもつ特性を理解するための科学実験的な要素（例えば、縦挽きと横挽きの違いや、まさ目面、板目面、木口面の加工性の違い等）を組み込むことにより、材料としての特徴を理解した人間を育てことはもとより、ステップ3へのスムーズな移行を支援するとともに、先達の残した文化遺産（彫刻や建築物等）を技術的な観点から理解できる素質が育まれる。

(2) この活動によって目指すもの（育まれるもの）

- ・ 創造的な思考で問題を解決できる人間
- ・ 材料としての特徴を理解した人間

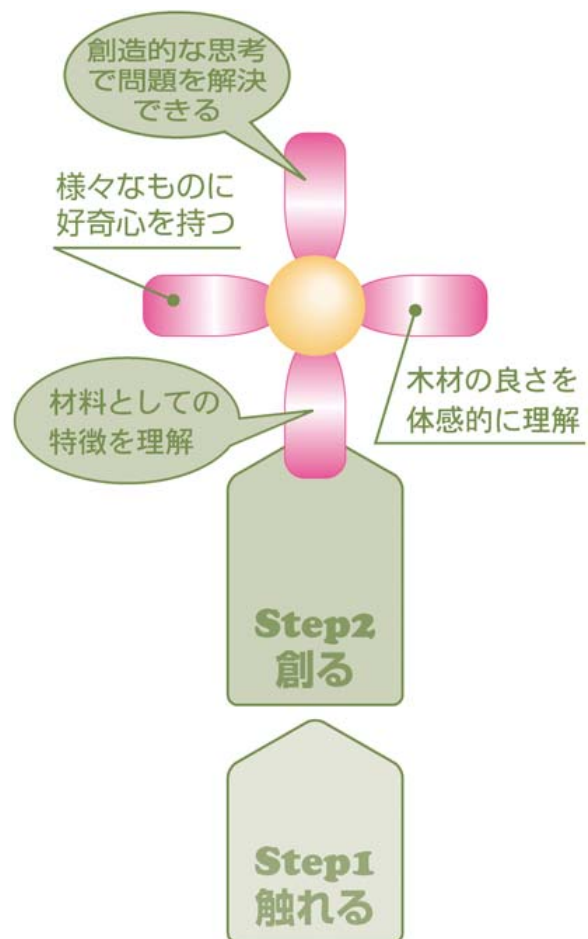
(3) 活動のキーワード

- ・ 木でのものづくり、木工活動、日曜大工
- ・ 彫刻、伝統工芸
- ・ 木材の特性をつかむための科学実験 等

(4) 活動を行うに当たっての留意点

これまで、木材を用いたものづくり活動は、学校を中心に行われてきたところであるが、完成した作品を持って帰らない等の事例も見受けられる。

また、余暇活動などで行われる場合には、楽しいということが重要であるが、更に使うときにも楽しいものを作ることが重要である。このため、指導者や設備などを考え、質の高い活動になることが求められる。加えて、ステップ3に移行しやすくするためにも、木材の科学的な特性等に対する好奇心を喚起することが必要である。



ステップ 3 知る活動「知り、理解し、行動する」

(1) 活動の概要

優れた体験活動（特にステップ2）は、木材に対する興味や好奇心を喚起する。

この段階においては、これら興味や好奇心に十分答えるために、木材と環境の関係について、科学的な知見を基にした知識を提供する。それにより、木材の利用と環境の関係を理解した人間、そして、その理解を基に、木材製品を選択・利用できる人間が育まれる。

また、科学的な知見を基にした知識を持つ事は、森林に対する更なる好奇心を喚起させ、森林体験活動への参画はもとより、直接的・間接的を問わず、森林育成活動へ参画する人間が育まれることが期待される。

加えて、木材の利用については、一見、森林の育成や地球環境の保全と相反する事象にとられがちであるが、木材利用とこれらの関係について気づくことをきっかけに、どのような活動や生活が環境に、どのような影響を与えているのかを判断し、消費活動をはじめとした、環境に配慮した行動ができる人間も育まれる。

(2) この活動によって目指すもの（育まれるもの）

- ・ 木材の利用と環境や文化の関係を理解した人間の育成
- ・ 木材製品を選択・利用できる人間の育成
- ・ 環境を配慮した消費活動をはじめとした生活ができる人間の育成
- ・ 森林育成活動へ参画する人間の育成

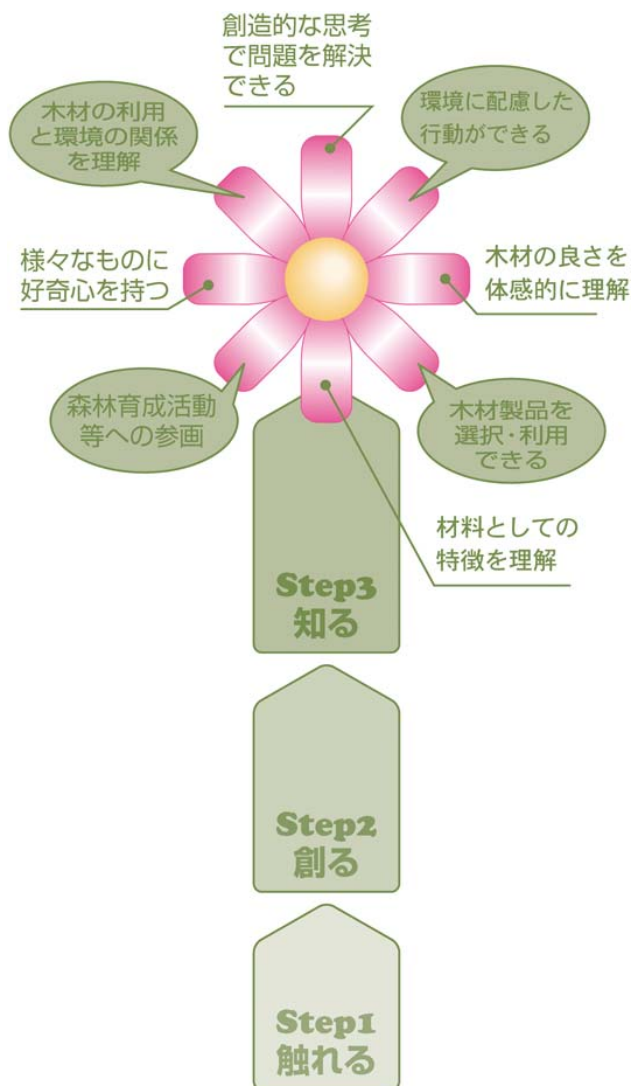
(3) 活動のキーワード

- ・ ステップ2の活動に連動した情報や教材の提供 等

(4) 活動を行うに当たっての留意点

これらのステップでの活動を通じて、多様な考え方をを持った人間が育まれることとなることから、これらの考え方も包含した情報の提供を行うことの検討が必要である。

また、自ら学ぶことに対する意欲を醸成するための仕組みも合わせて必要である。



平成20年 3月

財団法人日本木材総合情報センター